



河口湖と雪化粧の富士山（本文中に関連記事があります）

## 目次 / contents

新年の挨拶	2
新年あけましておめでとうございます	
ひと・まち・地域	4
米国の BID 及び TIF によるエリアマネジメント（ニューヨーク編）／中塚一	
高槻市の摂津峡周辺が盛り上がっている！その1	
／原田弘之・武藤健司・片山麻衣	8
地域から少子高齢化への対応を考える（その14）～北海道で人口が増えている東川町の増加要因を考える～	10
／森脇宏	
ひょうご持続可能地域づくり人材育成機構（HsO）を設立し、持続可能地域づくり実践者育成講座を開講しました／戸田幸典・中川貴美子・畑中直樹	13
震災にあったネパールを訪れました／	14
長沢弘樹・霜田稔	
きんきょう	15
子育てに学ぶ 地域づくり、企業経営	
／三輪泰司	
「東条川疏水ネットワーク博物館オープン記念シンポジウム」を開催しました	17
／森野真子・中川貴美子	
神戸市サインモニター調査について	18
／中井翔太	
コクヨのライブオフィスを見学して	19
／樋口彩子	
旅館をリノベーションした甲陽園のシェアハウスにモニター入居しました	19
／塗師木伸介	
富士山の麓から～育休所員からのお便り	20
／依藤光代	
うまいもの通信	21
リフトと生きていく私	
／黒崎晋司	
まちかど	22
デザインマンホールにハートがずっきゅーん！	
／中村孝子	



新年あけまして  
おめでとーございます

#### 代表取締役社長／森脇宏

アルパックの経営は、2012年春の組織再編以降、皆様のご支援と社員の奮闘によって、着実に前進を続けています。営業の前進だけでなく、人材の確保と育成、総力結集の社内文化の徹底、社員のモチベーション向上等が進んでいます。また、去年は地方創生絡みの業務が多く、経営面での効果だけでなく、地方創生の背後にある地域の諸問題を見直し、我々が果たすべき役割を再認識することができました。

こうした前進や認識を受け、次の発展を目指して、2016年度には再度、組織を再編します。営業・業務の総力結集をさらに強めるため、全グループが集結する大阪本部を設置します。ただし、本社は発祥の地・京都のままです。また、再編に伴って、大阪のオフィスも現在のOBPから淀屋橋へ移転します。新しいオフィスは淀屋橋駅（京阪、地下鉄御堂筋線）から直ぐで、緒方洪庵が開いた適塾のすぐ南側です。適塾は、多くの優れた人材を輩出したことで有名ですので、我が社もそうなりたいと思っています。

組織再編もオフィス移転も、一つのエポックではありません。アルパックでは2013年に経営理念を策定し、我々の社会的使命を「持続可能な地域づくりへの貢献」とし、「地域づくりの多様なモデルの創造を通じて、日本の地域づくりをリードする」ことを将来像に掲げました。こうした経営理念にふさわしく、地方創生の背後にある諸問題にも応えられるよう、より一層、全社を挙げて提案力や実践力を高めていきたいと思っています。

アルパックは、1967年2月3日の節分の日に創立しましたので、来年（2017年）には、創業50年を迎えます。今後、海外や国内の社会経済情勢は、テロやISIL（イスラム国）による社会不安、中国をはじめとするアジアの経済状況、金融や為替などに伴って変動し、それらが地域に大きな影響を及ぼしていくと予想されますが、これからの50年間で、どのような事態が生じて、一貫して地域に寄り添って、“持続可能な地域づくり”に貢献していきたいと思っています。引き続き、ご指導とご支援をよろしくお願いいたします。

#### 名誉会長・顧問／三輪泰司

昨秋11月14日、パリの同時多発テロ。世界が震撼した132名もの犠牲者でした。フランスも現今の時代相の真ただ中にあるようです。しかし、永い目で見ますと、この国とパリを流れる潮流は、知的なエスプリだと思えます。

20年前になります。1996年京都東ロータリークラブの会長を務めました。クラブの創立40周年に当たっての記念事業を京都コンサートホールの柿落としに演奏したパリ管弦楽団の皆さんを法然院で邦楽・お華・お茶でおもてなしすることと、パリ国際大学都市の日本館への図書寄贈と決めていました。

前年の6月、ニースでの国際大会の帰途、家内と二人でパリへ寄り、国際大学都市の日本館に、小林茂館長を訪ねました。ところが、9月5日、フランスはマルロア環礁で核実験。南太平洋の国々が一斉に抗議。我が国でも「フランスと仲良くするのはいかかか」と疑問の声が上がりました。小林館長とお話し「このような時こそ、正確な知識を」と、丁度被爆50年の年で再版された『写真集 原爆を見つめて』と日本原水爆被団協の『被爆者からの伝言』の2冊を寄贈図書に加えました。ロータリーの究極の目的は「国際理解と恒久平和」です。私たちの図書は、平和の武器でした。時の奥田幹生文部大臣、池田行彦外務大臣から、私たちの事業に感謝状を頂きました。

国際大学都市は、パリの南14区、環状道路（昔の城壁跡）沿いにあります。37haの敷地に40ヶ国の学生寮と、中央図書館、会議室、劇場、食堂、銀行、郵便局、温水プールなどがあり、約5000人の学生・研究者が学んでいます。第一次大戦後、ポアンカレ内閣のアンドレ・オノラ文部大臣の提案で、1925年にできました。

2011年12月、フランス総領事館は京都に移りました。元の関西日仏学館です。記念レセプションにお呼び頂いたのは、そのようないきさつからです。ドイツのゲーテ・インスティトゥートも京都にあります。文化センター、領事館そして大学都市が、文化庁移転へ確かな道筋ではないでしょうか。

本  
年  
も  
ど  
う  
ぞ  
よ  
ろ  
し  
く  
お  
願  
い  
い  
た  
し  
ま  
す



#### 代表取締役会長／杉原五郎

2ヶ月に一度、都市計画コンサルタント協会の関西9社で世話人会を行っています。それぞれの事務所を訪ね、お互いに近況報告をしたり、仕事の進め方について自由に意見交換しています。宮城県石巻市の復興まちづくり視察を行った他、「都市の聖地づくり」研究会を進めています。社員がゆとりを持っていい仕事ができ、この仕事をしていてよかったと実感できるようにしていくことなど、各社には共通する課題が幾つかあります。「ライバルであり、仲間でもある」このことを共通の思いとして、元気な関西、よりよい日本のまちづくりをめざして、引き続き努力していきたいと思えます。

#### 取締役副社長・東京事務所長兼名古屋事務所長

／堀口浩司

当社は京都・大阪の関西の2事務所を核にして、福岡、名古屋、東京で各地の独自事情に合わせた展開を行ってきました。しかし近年は発注方式の変化や、総合的な課題解決と高い専門性・技術力を同時に要求されるようになってきています。そのため地域事務所としての機能だけでは限界があり、大阪を中心に技術スタッフを集約し東京・名古屋と連携しつつ、より高度な技術的要求に応えられるよう体制を整えつつあります。東京や名古屋の事務所でも各スタッフがユニークな専門性を確立し、人材の補強や専門性強化に努力していきます。また各地に共通するテーマである大規模災害からの復興事業や平常時の取り組み、事前の計画作りについては、引き続き取り組んで行きたいと思えます。

#### 取締役大阪事務所長／中塚一

近年訪れた都市や村の中で、沢山の住民や来訪者の方々が集まっておられる場所の共通キーワードは「居心地の良さ」。例えば、美味しいコーヒーを飲みながら読書できる図書館、ご機嫌な仲間とワイワイ会話しながら新しいアイデアが生まれるレストラン、古民家を皆で掃除して来訪者にお茶を接待する縁側、見知らぬ地でベンチに座りホッとできる広場など。

しかし具体的に創り出していこうとすると、これが難しい。いかに暮らしやすく、持続可能でアクセスしやすい場所をつくるか（計画的志向を持つ場所のガバナンス）。今年も「書を捨てよ（持って）町へ出よう」です。

#### 取締役副社長／馬場正哲

お正月は太古より、家に歳神様をお迎えし、祝う行事です。この年の作物が豊かに実るように、家族みんなが元気で暮らせる約束をしてくれる神様です。幼い頃は地域の緊張感が伝わって自然な気持ちで祈ったものです。近頃は習慣も気分も薄れました。今年、尼崎の猪名寺で「石見神楽」を上演します。「自然と文化の森構想」の夢が叶います。最大の山場は「八岐大蛇」で、地域の安寧と繁栄を祈ります。地域の皆様と「自然」への畏敬と恩恵をもう一度感じ取ることになればと思います。尼崎市制100周年でもあり、地域からの新しいまちづくりの動きにつなげていきます。

#### 取締役京都事務所長／松本明

この3年、縁あってけいはんな学研都市の仕事をしています。入社した頃の頃、三輪名誉会長やOBの霜田さんが奥田東先生をお手伝いして実現に向け奔走されていましたが、私自身は入社後30年余り学研にはほとんど関わりがなく、今回「成長の限界」や「奥田懇提言」など一からの勉強でした。学研法制定から29年、「サードステージ」を間もなく終え、平成28年度から学研都市は「新たなステージ」に入ります。既に約130施設が立地し、我が国有数のオープンイノベーション拠点として、持続的エコシステムの形成が目指されています。アルパックも今後とも元気な関西に向けお役に立ちたいと思えます。

#### (株)よかネット 代表取締役(九州事務所長)

／山田龍雄

糸乗より社長を引き継ぎ、今年で早や20年目を迎えます。引き継いだ1997年当時は、糸乗時代の貯蓄もあってなんとか経営を維持しておりましたが、バブル崩壊後の影響もあって発注業務及び委託金額の低下などによって売上げが落ち込み、赤字決算となった時期もありました。自転車操業ながらも、ここまで経営が維持できたのも、ひとえにアルパック九州事務所から築いてきたネットワークがあったからこそと思っております。

今年も新たな業務にチャレンジしていきたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどお願いします。





# 米国の BID 及び TIF によるエリアマネジメント

(ニューヨーク編)

取締役大阪事務所長 中塚一

前号に引き続き、「米国の BID によるエリアマネジメント」をテーマに視察した3都市（ミルウォーキー、シカゴ、ニューヨーク）の内、ニューヨーク編を報告させていただきます。

## ニューヨーク市の BID は約 70 地区

市域人口約 800 万人、都市圏人口約 2,000 万人の「ビッグ・アップル」ニューヨーク市。ニューヨーク州とニューヨーク市では、1981 年に BID 制度を法制化し、2014 年現在、約 70 地区で BID が組織化されています。多数の BID が立ち上がる先駆けになったのがグランドセントラル・パートナーシップであり、その成功により他の地区が追随していき、今ではミッドタウンを埋め尽くすように、様々な BID 組織が活動しています。



ミッドタウンを埋め尽くす様々な BID 組織

## 駅周辺の環境改善—グランドセントラル地区

29 面のホーム、46 の発着番線が集まるグランドセントラル駅。乗降客数は約 70 万人/日と巨大なターミナルであると共に、その歴史的でドラマチックな空間が数々の映画に登場しています。（大阪では、大阪・梅田駅約 240 万人/日（北新地駅含む）、難波駅約 90 万人/日）（大阪難波駅、JR 難波駅含む）なので難波周辺と同程度）

グランドセントラル BID が発足した 1988 年当時は、巨大ターミナル周辺の課題であるひたくりヤスリ、ホームレス（数千人とも！）、ごみの散乱等が酷く、空き店舗・空き業務床の増加等により、不

動産価値が急激に低下していきました。そのような状況を改善するため、ビルオーナー等が自主的に BID を組織化し、地区のビジョンの共有、具体的な環境改善の活動を展開し、商業・業務地及び観光スポットとして劇的な再生を果たしました。特に地区の清掃や警備により大きな成功を収め（約 20 年間で犯罪が 85% 減少）、さらにその後 1992 年に BID が債権を発行し、3,000 万ドルの資金の調達を行い、街路灯整備、植栽、歩道の段差解消などの公共空間を整備しています。

2014 年の事業規模は約 1,365 万ドル/年（約 16 億円（1 ドル = 120 円）、評価税約 1,270 万ドル/年）、まさに地区を運営する自立的な自治運営組織と言えます。特に日本では通常、行政に要望するような公共空間の整備・改修まで BID で行い、店舗や業務テナント等の民間投資を誘発しているのが印象的でした。

## 都心公園の自主運営—ブライアントパーク地区

グランドセントラル BID の成功を契機に、ホー



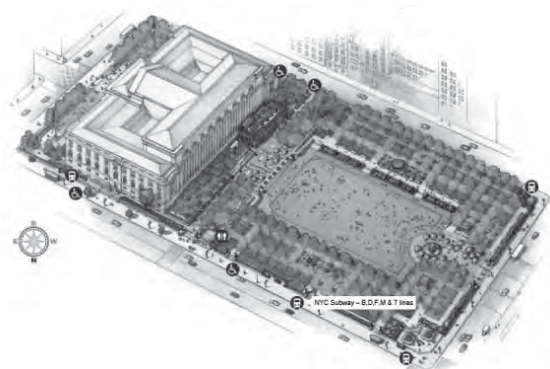
2013 年に駅舎生誕 100 周年を迎えたグランドセントラル駅



周辺の快適な歩道空間（街路灯や交通標識の一部も BID が整備）

ムレス及び麻薬の密売所となっていたブライアントパークも1986年にBID組織を立ち上げ、環境改善に乗り出します。

ブライアントパークBIDは、約3haの公園を含むニューヨークでも数少ない公園管理運営型のBIDです。公園の管理運営を市から無償で受け、全体事業費約880万ドル/年(約10億円/年)の内、芝生広場の周辺のレストランや売店のレンタル収入約15%、公園をファッションショーやスケート場として使う使用料が約50%、公園周辺の不動産所有者からの評価税額約13%等で、維持管理を行っています。具体的な事業は、民間のマネジメント会社(ブライアントパークコーポレーション)を立ち上げ、運営委託を行っています。また様々なイベントプログラムの提案を市民・民間企業から求め、例えば冬のスケートリンクはスポンサー企業(バンク・オブ・アメリカ)がCSRで負担するなど、パブリックとプライベートの多彩なイベントをバランスよく開催しています。



ミッドタウンの大規模な公園をBID組織・民間企業が運営



中央に芝生広場、イスは自由に移動できる(集客約2万人/日)  
(写真撮影当日は急に冷え込んだので人が少ないです)

### 5,000万人の世界の交差点—タイムズスクエア地区

近年、年間約5,000万人以上の観光客、ブロードウェイ・ミュージカルの中心地、グローバル企業の広告、年末のカウントダウン中継で有名な「世界の交差点」タイムズスクエアですが、1960～1990年はニューヨークの危険地帯を代表するような地区となっており、1992年に環境・治安の悪化に対して安心して観光客等が来訪できる地区をめざしてBID組織「TSA(Times Square Alliance)」が組織されました。

タイムズスクエア地区の特徴は、公共が道路空間を歩行者空間に再編し、維持管理や地区のプロモーションをBIDが行っている点にあります。全体事業費約1,170万ドル/年(約14億円)の内、評価課税が約70%、その他企業からの寄付やイベント等のプログラム収入が約25%(コンテナによるスナックボックスや企業の広告ボックス等)で、清掃・安全のための事業(約60%、常に清掃活動が頻繁に行われている)、マーケティングやプロモーション



超巨大なデジタルサイネージ(10年前に比較して広告料は約2倍!)



車両通行止め区間を広場化し、ベンチ等を設置





ひと・まち・地域

ン事業（約 35%）等を行っています。平日の夜でも観光客等が街に溢れており、正に「世界規模で人が人を呼ぶ広場」となっています。

#### 金融街から 24 時間混合都市ヘーダウタウン地区

ウォール街に代表される世界の金融街としてのダウタウン地区。しかし 1987 年のブラック・マンデー以降、1995 年には金融街の空き床率は 30% 以上、約 180 万㎡に及び空き床が発生したと言われています。またニューヨーク証券取引所とニューヨーク連銀はなかなか移転しませんが、多くの金融機関がウォール街に置いていた本社機能をミッドタウンやニュージャージー州等に移転し、ウォール街には純粋米国資本の大手金融機関の本部は無くなったと言われています。そのため市の税収は約 1 億ドル/年の喪失となり、金融街（ダウタウン）の再生が喫緊の課題となりました。

ニューヨーク市は 1995 年に、24 時間稼動するハイテク・コミュニティへの転換（24 時間混合都市）を目標とする「ロウアーマンハッタン経済再活性化

計画」を発表し、IT 産業や居住機能の導入による 24 時間魅力ある都市へと地区全体をコンバージョンする戦略を打ち出しました。そして地区では、不動産所有者と専門家によるダウタウン・ニューヨーク 振興組合（Alliance for Downtown New York: 以下 ADNY）を 1995 年に設立し、事業の具体化を図りました。

「ロウアーマンハッタン経済再活性化計画」では、建物のコンバージョンにより IT 産業の集積や質の高い居住機能を誘導するために、市は固定資産税の減免等を期間限定（1995 年から 2007 年）で行い、賃料を抑え IT 企業などのテナントの誘致を図っています。1995 年に整備されたニューヨーク情報技術センターのスマートビルディングへの改修の成功が、その後に約 20 棟のハイテク IT 装備ビル化に繋がっているとのこと。また、業務ビルの住宅へのコンバージョンも進んでおり、約 3,000 戸の住宅が供給され、空き床率は僅か 5 年間で約 4% にまで減少し、床のレンタル価格も年々上昇し



金融街が 24 時間混在都市へ



業務ビルをトレーニングルーム等を備えた高級住宅にコンバージョン



IT ビル化を先導したニューヨーク情報技術センター



24 時間混合都市でも清掃・治安維持は基本アイテム



小公園の維持管理と  
ビジターインフォメーションキオスクの運営



無料回遊バス  
(ダウントウンコネクション HPより)



ています。

ADNYは、事業規模約1,800万ドル/年(約21億6千万円/年、内評価税額約88%)のニューヨーク最大規模のBID組織であり、一般的な清掃や治安維持(支出の約38%と他BIDに比べて少ない)や街路景観の整備(街路灯や案内板、交通標識の設置、ベンチやごみ箱などの設置、緑化、歩道の改築等)などの他、空きビルの住宅やITビルへのコンバージョンの支援、プロモーションやマーケティング、中小企業支援など、ビジネス経済開発に特化した事業を展開しています。

ADNYの組織運営は、理事会40名(不動産所有者等で3年任期)、スタッフ約60名、現場スタッフ(清掃やセキュリティスタッフ等は外注)約120~150名と人材も豊富であり、ロウアーマンハッタンの地元の窓口・仲介役として市へのロビー活動も行っているなど、人材・ノウハウ・資金を兼ね備えた自律した地区自治組織として様々な事業展開を行っています。

特に12ヶ国語の観光ガイドの発行や歩行者用サインの整備、ビジターインフォメーションキオスク、無料回遊バス(ダウントウンコネクション 7台運行)、Web・SNSでの情報発信など、観光プロモーション活動も活発で、平成26年には観光客が1,250万人と3年前より約600万人増加したとの事でした。

このように居住者、旅行者、IT産業の従業者がダウントウンに集まることで、これまで金融街で午後6時以降や週末にはレストランが閉店していた街が、レストランやカフェ、生活支援施設など様々な店舗が集積し、24時間、365日稼働している街へと変貌しています。

#### 地区の自律型管理運営に向けて

今回の各都市の視察を通じて感じたことは、BIDやTIFはツールであって、地区の持つポテンシャルや課題に応じて地元と行政とがビジョン(目標)を共有し、都市のインフラ(道路・公園、商業・学校・医療、交通・情報、エネルギー、防災・防犯、歴史的建築物等)の再整備や維持管理を、地区の自

律的・持続的な仕組みによって行っていくことが重要であることでした。

今回紹介したBIDは、紙面の関係で大都市の事業規模の大きな組織が多かったのですが、近隣商業地や人口規模の小さな都市等での中小規模のBIDも、現在、増加してきているとの事でした。また、TIFについても、道路や公園などのハード整備が主と思っていたのですが、歴史的建築物の改修や工場跡地のブランフィールドの地盤改良等にも導入されているとお聞きし、日本においても行政の財政悪化により新たな公共投資が期待できない現在、税法上の課題はありますが、特区適用や独自の条例により早急に導入を検討すべきツールであると感じました。

日本においても、大阪市が平成26年2月に「大阪市エリアマネジメント活動促進条例(いわゆる大阪版BID条例)」、北海道倶知安町が平成26年9月に「倶知安町ニセコひらふ地区エリアマネジメント条例」を制定する等、地区の自律的な管理運営についての条例を制定する動きが活発化してきています。特に大阪市においては、全国を先導し、大規模再開発のグランフロント大阪や公共空間を活用した大阪城公園や天王寺公園(BIDではないですが)等が始動しており、今後は御堂筋沿道やなんば周辺などの既存市街地において展開を図っていく段階になってきています。今回の視察を通じて、「(仮)大阪版TIF条例」が制定されると歴史的建築物が残る船場や堺筋等、環状線周辺の木造密集市街地、西成区あいりん地区等、様々な地区の環境改善や魅力向上に適用できるのではないかと考えています。

最後になりましたが、今回の視察では団長の小林重敬先生、副団長の青山公三先生、事前に文献資料等をご提供いただいた(公社)全国市街地再開発協会の事務局の方々、多彩な参加者の方々に、大変お世話になりました貴重な機会を頂いたことに感謝します。

#### 【参考文献】

最新エリアマネジメント(編著 横浜国立大学名誉教授 小林重敬)  
BID制度を活用した中心市街地の活性化(京都府立大学名誉教授 青山公三)





ひと・まち・地域

# 高槻市の摂津峡周辺が盛り上がっている！その1

地域産業イノベーショングループ地域活性化チーム

／原田弘之・武藤健司・片山麻衣

摂津峡は、大阪府高槻市の芥川上流部にある風光明媚な古くからの名勝です。高槻市では、平成26年度に、摂津峡を含む地域の豊かな自然や歴史等を活かし、観光振興と環境保全の両立を図りながら、地域の多様な関係者との連携のもと地域活性化をめざす「摂津峡周辺活性化プラン」を策定しました。

平成27年度はそのプラン推進のキックオフの年で、さまざまな取組を進めています。ここでは、その中から2つの取組を紹介します。当社はこれまで、そのお手伝いをさせていただきました。

摂津峡へのおもな来訪者は、ハイカーなどの中高年層です。夏にはバーベキューや水遊びに来る若者もいるのですが、そのマナーが問題になっていました。そこで、摂津峡への新しいイメージ付与や新しい顧客開拓をしようということで、万博公園などで「ロハスフェスタ」の開催ノウハウを持つ(株)シティライフNEWと連携し、イベントを開催することになりました。「ロハス」という言葉自体は以前から使われていますが、あらためて、「環境と健康によい暮らし」のイメージを摂津峡から発信し、摂津峡自体のブランド構築にも役立てようということでした。また、春には「さくら祭り」が何十年も続いているのですが、秋を楽しむ恒例行事としての可能性を検討するねらいもありました。

当日は、摂津峡周辺の農家団体、飲食店や旅館などの事業者、高槻市のキャンプリーダー、子ども自然体験関係のNPOなど摂津峡周辺の主体どうしが



## 「秋の摂津峡ロハス DAY」を開催！

平成27年11月15日(日)、摂津峡公園の桜広場には約20ブースの地元野菜マルシェやクラフト体験、高槻市内外のこだわりの飲食や物販のお店やキッチンカーが並びました。おもに小さい子どものいる家族連れや摂津峡に歩きに来たハイカーなど、約1,000人が楽しみました。





お互いに訪問し合ったり、話したりするなど、地元関係者の交流の場としても機能し、思わぬところでも好評でした。

恒例行事化に向けては、さまざまな課題がありますが、一歩ずつ前進させていければと思います。

### 「芥川山城 de 木こり体験・ベンチづくり」を開催！

摂津峡公園の東側、芥川に囲まれるようにそびえたつ標高約 180m の三好山。戦国時代には「芥川山城」と呼ばれる山城がありました。三好長慶などが城主となり、一時は近畿一円を勢力下とするなど、政治の拠点として栄えました（のちに織田信長により侵攻され落城）。



大阪府下では最大規模の城郭を有する山城で、現在も石垣や土塁などが残る三好山。摂津峡周辺活性化プランにおいては、その歴史的価値を再認識し、観光的利用について地域全体の機運を高め、来訪者を受け入れる環境整備を進めることを位置づけています。

平成 27 年 11 月 22 日（日）、70 名近い小学生が三好山に初めて登りました。地元の歴史愛好者から三好山の歴史について学び、間伐による木を使ってベンチを作りました。里山などで子ども向けの体験プログラムを行う NPO 法人ノートが主催し、事前の草刈りなど、地元の協力も得て実現したプログラムです。

登山口から山頂までは、子どもでも 30 分程度で



到着できます。スリルある細い道を抜け山頂に到着すると、豊かな自然とともに、市街地や大阪市内が一望できます。力を合わせて完成させた 4 台のベンチを山頂に設置すると、子どもたちにも達成感が生まれました。「楽しかった」、「また来たい」と、子どもたちにとって思い出深い 1 日となりました。

これからも、地域住民など関係者とも連携しつつ、子どもたちが身近な自然を体験できる場として、継続的に取組を行い、地域の歴史と森林を同時に学ぶ場としての取組を継続的に行い、三好山（芥川山城跡）の整備や活用に展開できればと思います。





## 地域から少子高齢化への対応を考えるその14

～北海道で人口が増えている東川町の増加要因を考える～

代表取締役社長 森脇宏

前々号（193号）では、北海道で人口増と社会増がある3町（ニセコ町、東川町、芽室町）を取り上げ、それぞれの年齢階層別推移の特徴を確認しました。今号では、このうち「幅広い年齢階層の転入」がある東川町に着目し、その要因等について考察します。

### 東川町の人口増加の特徴

（1995年頃から増加）

まず、東川町の人口増加の特徴を把握するため、1970年以降の人口の推移を図1にとりまとめました。これによると、1995年まで人口減少が続き、その後、増加に転じていることがわかります。したがって、1995年頃から現在の人口増加の要因が機能し始めたものと推察されます。なお、ここで示したデータは2010年までですが、現在も人口増加は続いているようです。

（昼夜間人口比率は100%以上）

さらに、人口増加が始まった1995年以降の昼夜間人口比率等をみると、図2のように一貫して100%を越えています。これは、全国的に名高い旭川家具の約3割が東川町で生産されるなど、歴史的に産業が集積していることによるものと思われます。また、昼間人口も増加しており、この間の人口増加が、隣接する旭川市（人口約35万人）のベッドタウン化のように、単なる夜間人口の増加だけではないことを示しています。ただし1995年から2000年にかけて、昼夜間人口比率が一旦下がったものの、2000年以降は反転上昇しており、これについては後ほど触れます。

### 人口増加要因の考察

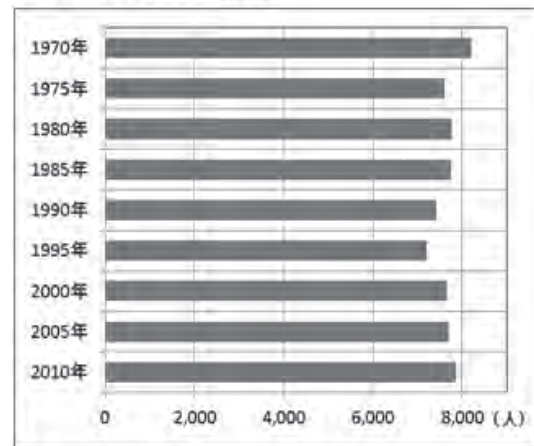
（産業面からみて要因は不明）

人口増加要因を産業面から考察するため、産業別に従業者数の推移をみましたが、概ね全国的な傾向（ex. 医療福祉の増加等）と同様で、東川町独自の傾向は読み取れませんでした。おそらく産業以外の要因が効いていると思われます。

（東川町 総合戦略推進室長との議論）

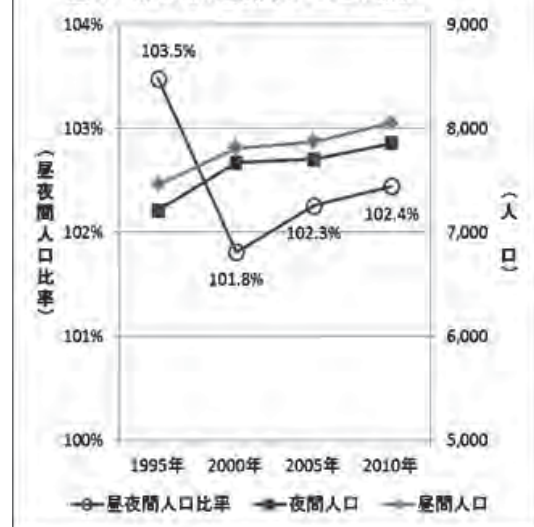
人口が増加している要因について、産業などの統

図1. 東川町の人口推移



資料：国勢調査（各年）

図2. 東川町の昼夜間人口比率の推移



資料：国勢調査（各年）

計から分析しても見えてこないため、東川町の総合戦略推進室長にお話をお聞きしに行ってきました。室長も「人口増加の理由は、よくわからない」と言われていましたが、いろいろ議論してわかってきました。東川町の人口増加の要因は、以下のように、まちづくりの経緯から説明すると、理解しやすいと思います。

（はじまりは住宅開発）

東川町では、1995年まで人口減少が続いていたため、ともかく人口増加を図りたいとの思いから、





写真「君の椅子」の例  
出典：東川ホームページより

まず東川町土地開発公社や民間事業者による住宅供給を進め、人口は急速に増えました。しかし、この時点での人口増加に昼間人口の増加が追い付かず、昼夜間人口比率が低下したのは、前述のとおりです。

(合併ではなく自立の選択)

その後、2000年頃から全国と同様に市町村合併の議論が始まり、東川町では最終的には自立が選択されました。その際に「どう自立していくのか」が議論され、現在の「まちづくりの考え方」の原型が形成されていったようです。2002年には環境保全・景観形成・開発規制をセットにした「美しい東川の風景を守り育てる条例」が制定され、その後、後述する多様な取り組みを通じて、「まちづくりの考え方」は実践的に補強されてきています。

ただし、この「まちづくりの考え方」は、人口増加に絡めて、まだ定義されてはいません。結論を先に述べる形で仮に定義すると、「東川町のファン（住み働き続けたい人）を町内外につくる」ことと言えそうです。

#### 人口増加につながる多様な取り組み

「東川町のファンづくり」をコンセプトに、人口増加につなげている取り組みは多様で、特効薬的なものはありませんが、主要なものを例示すれば、次のものが挙げられます。

(環境、景観の重視)

「写真の町」を宣言（1985年）するほどの優れた景観や、大雪山の雪解け水が豊富な伏流水として湧出するため上水道が不要であることなど、環境と景観を活かした景観条例を前述のように制定しています。その条例の下で、例えばグリーンビレッジという住宅地が、建築緑化協定で環境の創造と維持に努める形で整備・管理され、町外からの移住者を受け止め、モデルとしての役割を果たしています。その他にも、優れた住宅地が多様に提供されています。

なお、そもそも東川町は農業地域であり、その優れた景観は農地が適切に利用されているからこそ成立しています。したがって、東川町としては、人口

が増えるに任せて農地転用を進めるのではなく、そろそろ農地転用の上限に達しつつあるという認識も持っておられます。

(人的ネットワークの形成)

「写真の町」宣言以降、毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」等が開催され、この中で形成された写真家等との人的ネットワークが、前述の取り組みと相まって効果を発揮し、写真を契機とするネットワークで、東川町の魅力を高く評価する人々が移住してくるようになってきました。また、移住した人が、知人・友人を呼び寄せてくれる例も出ています。

(福祉施策の充実)

子育て支援をはじめとする福祉施策も充実しています。評価が高い施策としては、児童手当、医療費助成（15歳まで全額助成）、出生届や婚姻届（写し）の記念品としての贈呈、町内工房で製作した手作り椅子「君の椅子」の贈呈（写真参照）、幼保の一元化などが挙げられます。

なお、筆者が東川町で利用したタクシーのドライバーも、東川町の人口が増え続けていることを知っており、その理由として、手厚い子育て支援を挙げるほど、福祉の充実は広く知られているようです。

(移住定住促進策)

東川町の移住定住促進策も、重要な役割を果たしています。東川町のホームページのトップページには、「東川町に住んでみませんか？」というアイコンが配置されており、クリックすると東川町の紹介や移住希望者に必要な各種情報が掲載され、役場内のワンストップ窓口も紹介されています。また、実際に役場内に定住促進課という担当課も設置されています。

さらに、東川町の魅力を体験してもらえよう、体験プログラムをコーディネーターする（有）アグリテックという機関も設置されています。

(起業支援)

東川町で起業する場合、土地、家屋、設備等の投資の3分の1以内を補助しており（1事業者上限





1,000 千円)、転入者も利用可能です。事実、前述のホームページの「東川町に住んでみませんか?」というアイコンに、この制度の紹介がつながっており、この制度を利用してお洒落なカフェやクラフト工房等を起業している転入者も多いようです。

なお、産業に関しては、前述のように産業別の従業者の増加を調べても、転入者を呼び込む強力な産業は見当たらず、他の自治体の傾向と大きな差はありません。ここからは仮説ですが、転入者が起業する事業は、東川町としての特徴がある訳ではなく、旭川都市圏内の需要に対応する事業を、適宜、転入者が選択して起業していると推察できます。こう考えると、「アメリカ大都市の死と生」を執筆したジェイン・ジェイコブズが、別の著書「発展する地域 衰退する地域／地域が自立するための経済学」において、「新たな産業は近隣の都市地域の需要に応じて発展する」と述べていたセオリーが、旭川都市圏内で具体展開していると言うこともできそうです。こうした推論が成り立つならば、東川町のように都市圏内需要に対応する起業で、転入者の就業の場を確保する方法は、ある程度の規模の都市圏内に位置する自治体では可能と考えられます。

#### 考察のまとめ

以上の考察をまとめますと、東川町の人口増加要因に関しては、次のようにまとめることができます。  
(東川町ファンづくり)

現時点で、東川町の「まちづくりの考え方」は人口増加に絡めて定義されていませんが、仮に定義すると、前述のように「東川町のファン(住み働き続けたい人)を町内外につくる」ことと言えます。これは、観光やリゾートで「遊びに来たい」という魅力づくりと似ている面もありますが、本質的には別の方向性だと考えられます。

「東川町で住み働き続けたい」と思ってもらえるような魅力を、多様な取り組みを通じて創造し維持していくことで、東川町のファンを町の内外につくっています。そして、そのファンの一部が東川町に住みに来たり、働きに来たりしていると

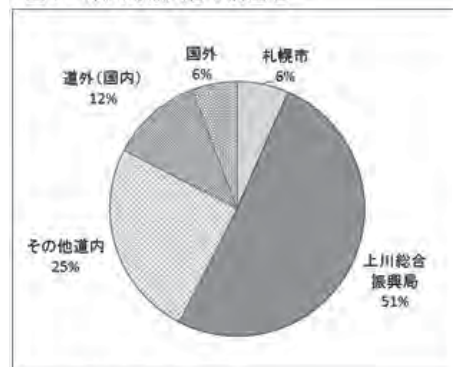
理解できます。

(立地条件を活かした魅力づくり)

東川町の魅力の中心、特に他の自治体に比べて優位な魅力は、大雪山という自然環境と景観です。これを抜きに、今日の東川町の発展は語れません。

同時に、北海道第二の都市である旭川市に隣接し、旭川空港を利用すれば東京との行き来も容易であるという地理的条件も活かしていることも見落とせません。例えば東川町への転入者の前住地を図3にみると、周辺の上川総合振興局内からの転入が5割と最も多いのですが、海外や道外からの転入者も一定の比率を占めています。これは、東川町の魅力を広く情報発信していることを示していると同時に、東京等との行き来が多い方の転入を容易にしているとも読み取れます。また、前述のように転入者を呼び込む強力な産業がなくても、転入者が適宜起業できているのは、旭川都市圏に位置するため、都市圏内の産業需要の存在が重要な役割を果たしていると考えられます。

図3. 東川町転入者の前住地



資料：国勢調査(各年)

(他の自治体が参考にできる可能性)

以上、東川町では、自然環境や旭川都市圏等の立地条件を上手く活用していることを確認しました。立地条件が異なる他の自治体が、類似の展開をすることは難しいのかも知れませんが、「ファンを内外につくる」という「まちづくりの考え方」の基本は、どのような自治体でも採用でき、それぞれの条件に応じて独自の展開が期待されていると思います。





ひと・まち・地域

## ひょうご持続可能地域づくり人材育成機構 (HsO) を設立し、持続可能地域づくり実践者育成講座を開講しました

地域再生デザイングループ／戸田幸典  
環境マネジメントグループ／中川貴美子・畑中直樹

### エネルギー分野の持続可能地域づくり実践者育成講座開講

平成 27 年、地方創生が叫ばれ、地域の担い手の確保が課題となっています。環境エネルギーの分野でも同様の課題を抱えています。固定価格買取制度により、再生可能エネルギーの導入は加速しましたが、資本力のある企業等が中心となる事例が多く、地域が主体的に取り組む例はまだ少ない状況です。また、「エネルギー」の視点だけでは、事業としては行き詰ってしまうことも多く、人口減少等による地域の課題や地域の自立など複数の視点とセットで取り組んでいくことも重要とされています。

そんな中、環境省の全国 3 地区のモデル事業のうちの 1 つとして（申請・採択主体 アルパック）、兵庫県但馬地域で、「ひょうご持続可能地域づくり実践者育成講座」を開講することになりましたのでご紹介します。

### 全国のトップランナーの実践者による講義と地域に役立つ事業化組み立て演習

講座は、基礎編、事業化編、ステップアップ編と約 2 年間かけて実施します。基礎編では、「環境エネルギー」の事業を地域で実践していくため必要なエネルギー分野の技術から関係法制度、経営、資金調達等の幅広い分野の基礎知識を学びます。そして、事業化編、ステップアップ編で、事業化の組み立てをグループワークにより体験し、一人でなかなかカバーするのが難しい幅広い分野をそれぞれの役割を補完する「チーム」を地域の中で育成していくことを目指しています。

基礎編の講師の方々には、地域で事業の支援や事業

化の取り組みをされている、事業の裏も表もご存じの実践者の方々を講師としてお迎えしてい



ロゴ

ます。1 コマ 2 時間では足りない、濃密な講義時間となっています。

### 24 名の幅広年代・職種の受講生でスタート

各地での 4 回の説明会を終えた後、選考会を経て、受講生を決定しました。受講生は、但馬地域の工務店、循環系の事業者、金融機関、環境 NPO、I ターン者、地域活動を行っている方々で、20 代～70 代と多様な職種と年代の方々が集まりました。基礎編を終えた後、事業化編の中で、どんなチームワークが育っていくのか楽しみです。なお、講座後、一定の要件をクリアした受講生は、「サステイナビリティ オーガナイザー（持続可能地域士）」として認定していきます。

### 持続的な運営に向けてひょうご持続可能地域づくり人材育成機構 (HsO) 設立

環境省のモデル事業としては 2 年間の予定ですが、その後も継続的に実施していくため、兵庫県、豊岡市、兵庫県立大学や事業パートナーの商工会議所、商工会、金融機関、NPO と共に機構（代表理事：当社取締役畑中）を設立しました。講座による人材育成だけでなく、講座後も事業化に関するサポートを行う予定です。取組の様子はホームページでも随時お伝えしていきます。

(<http://hso-t.com/>)



開講式の様子



開講式後交流会の様子



基礎編講座の様子



## 震災にあったネパールを訪れました

環境マネジメントグループ／長沢弘樹

アルパック OB／霜田 穂

### 震災から約半年

ヒマラヤ山脈の麓に広がるネパールで、マグニチュード8近い大地震が起きたのは、昨年4月末です。日本をはじめ国際社会からの支援が多数寄せられるものの、実際の復興はなかなか進んでいません。とりわけ、日本でも課題となった、地域のコミュニティの復興については、まずは住むところが優先されることもあり、手が回っていないようです。

昨秋、ネパール復興を支援できないかという相談があり、ネパールを訪れました。具体的な活動はこれからですが、簡単にご報告します。

### ネパールの世界遺産と地震の爪痕

ネパールは60年代からヒッピーの聖地として知られ、観光客が絶えません。特に首都があるカトマンズ盆地には過去の王宮等の史跡や寺院など7つの世界遺産があり、人気を集めています。ネパールのまちは中心に寺院を配し、周辺に商店や手工業の店が密集しています。柱や窓枠などに彫刻などの装飾が施された建物が多数あり、世界遺産とあわせて独特の街並みとなっています。

しかし、煉瓦を積み重ねた造りで耐震性に欠けるため、今回の地震で、貴重な観光資源でもある建造物が大量に倒壊してしまいました。さらなる倒壊を防ぐため、柱をつっかきにした建物も目立ちます。

ネパールも日本と同様に地震が多く、史跡や寺院は、何度も被害を受けています。これまでもドイツなど各国の支援で、長期にわたり、過去の地震被害の修復が行われてきましたが、今回の地震で再び被災した建物も多く、単純な修復に加えて、耐震性の確保が課題となっています。

我々が訪れたときも、地震前からの修復作業が継続して実施されていました。ネパールの古い建築物は、彫刻などの装飾の施された柱が特徴的ですが、柱が細く、耐震性の確保が困難なため、やむなく普通の柱に取り換えることも多いようです。

一方、住宅地など、世界遺産以外の地域では、手がつけられていない場所も多く残って



Taumadi 広場の西南の崩れたパゴダを見る  
撮影：アルパック OB 倉本恒一

います。行政の支援は資材の提供程度であり、建物を自力で修復するしかないようです。また、住民がばらばらに避難せざるを得ないため、コミュニティの継続も課題です。まちを歩くと、あちこちがれきが残ったままの場所があり、胸を痛めます。

### 歴史と文化を継承する復興が必要

ネパールはアジアの他の国と同様に急激な都市化が進み、まちの姿は大きく変わり続けています。今回の地震は、その流れをますます加速することになるでしょう。そのため、ネパールの震災復興には、日本における復興以上に難しい面がでると思っています。

観光対策として考えた場合、優先順位が高いのは世界遺産の修復です。しかし、ネパールが今後も魅力的な場所であるためには、世界遺産だけでは不十分であり、寺院や史跡を含むまち全体が歴史と文化を継承していくことが必要です。そこでは、実際の建造物などの物質面と、地域に根付き、継承されてきた精神的なものの両方の継承が重要ですが、とりわけ、「精神復興」ともいえる取り組みが重要ではないでしょうか。そのためにも、皆様の知恵を拝借しつつ、活動を続けていきたいと思っています。

最後になりますが、今回の訪問では現地及び日本の関係者の皆様に大変お世話になりました。深く感謝します。

### 精神復興の方法と目的と

説明が難しいのですが、概略は以下のとおりです。

まず、日本にもネパールにも自然崇拝の歴史があり、目で見える対象だけを扱う科学では捕らえきれない、深い感性を持っています。生活と宗教との関係が深いネパールでは、こうした感性が重要です。

次に、自然崇拝の上に成り立つ工学の発展です。ヨーロッパ発祥の近代科学の失敗の歴史を繰り返さず、ネパールに適合した、因果応報の思想を組み入れたサイエンスを再興する必要があります。

さらに、地理学者の川喜田二郎がネパールでの調査研究から開発援助の哲学かつ実践の方法である KJ 法を生み出したように、当地に内在する、学際的、野外研究、合意形成、創造的チームワークといった実践的活動の継承も必要です。

復興の活動を進めながら、ゆくゆくは現地の寺院の復興と、日本の若者や高齢者の人間形成の場とを組み合わせ「ネパール行脚」の活動を進めたいと思っています。(霜田)





きんきょう

## 子育てに学ぶ 地域づくり、 企業経営

名誉会長・顧問／三輪泰司

昨年11月28日、京都市保育園連盟創立60周年。八瀬野外保育センター45周年記念の第32回落ち葉まつりは、たいそうな賑わいでした。芝生広場から“ひいらぎの家”へ上がる石の階段が出来、水場での「学ぶワークショップ」藍染が盛況。レクチャー・コンサート「フルーツの歴史—パロックから現代まで」が好評でした。堀川高校出身で、愛知県立芸大教授の村田四郎先生、丹下聡子先生のフルーツ、内本久美先生のピアノ演奏に、丹下先生が、フルーツという楽器の色々と、バッハ、ヘンデル、モーツァルト、ジュネン、ドップラーの曲を解説され、超満員の“からまつホール”は、大きな感動で包まれました。

### 誰も皆、子どもだった 事実に基づいて考える

どなたか「自分は赤ん坊ではなかった」という方はいらっしゃいますでしょうか？

若い所員諸君と話しをした時「生まれて最初の記憶はなにですか」と聞きました。自分で記録していないですが、味覚・嗅覚・視覚等々の「感覚」に属することは確かなはずです。私は、伯父が写した写真があって、土鍋に手



藍染を学ぶワークショップ



もりの家

を入れておかゆを食べています。離乳食です。味覚です。私は味噌屋のせがれで、後継ぎにと祖父母に育てられたのですが、生まれた時、祖母は57歳。それで乳母がいました。祖父が亡くなった中学2年の時、通夜に来たおばちゃん「まあ、大きくなって」と抱きしめてくれました。思い出しました。髪の毛の匂いでした。嗅覚です。その“ハタのうば”の家に連れられたことがあります。草の中に座らされ、やっこらさと立ち上がった時、目の前が見わたす限り、まっ黄色でした。菜の花畑だったのです。視覚です。計算すると、満1歳8ヶ月です。そこは八瀬の里でした。

この事象記述の方法は、ジェーン・ジェイコブス流で、保育の現場で「エピソード」記述として一般的です。もう一つ、定量的調査から入る方法があります。保育園連盟の保育研究所、2015年度の実践論文で、給食の残食、即ち食べ残し調査の研究がありました。3ヶ月毎日の離乳食・幼児食を年齢別に全数計測し、個別児の特徴の記述も加えて分析しています。新奇性恐怖と言い、初

めはとっつきにくいですが、3・4・5歳と慣れてくると残食は、限りなくゼロへ際立って減ります。子どもは野菜を食べないということはありません。調理の工夫です。味、匂い、口あたり、五感で受け付け、慣れるのです。カレー味、ラーメン味とともに、味噌味、和風醤油味も受け入れています。ワールドワイドで調べたら「和食」一般を超える食の姿が解明され、食材流通が広がるのではないかと想像しました。

我々はしばしば、なににの目線ととか言いますが、ほんとうに分かるように努力しているのでしょうか。分かったつもりで留まっていないでしょうか。最も警戒すべきは思い込みです。錯覚、失念とともに人間の特技です。

### 人間は食べてできる 家庭にもある食育

誰でも人間は、“食べて”、人間になります。

1年365日、1日3食で、年1,095食。外食もあるので、家での食事を、年間1,000食とすると、10年で1万食。20年で2万食。自分の身体は、自宅での調理で造られているのです。誰が作っ



からまつの家

ているのでしょう。

食に関しては、私はたいへんラッキーでした。先ず第一。この新年で結婚して55年2ヶ月になります。仕事柄、外食も多いですが、ざっと5万食は、嫁さんの厄介になっています。

家内は同志社女子大の家政学部食物科の出身で、栄養士の資格を持っていますので、普通の主婦より少しは食の知識をもっています。実家が温泉旅館で、板前さんに仕込まれて、味付けや盛り付けの調理法も心得ています。

第二は、中学から大学まで、祖母と隠居で暮らし、戦時中にも関わらず、しかも成長盛りであったのに、食に窮しなかったことです。場所は、府庁の真裏、街の中で、敷地は200坪もあって、半分は畑でした。祖母は、明治26年に19歳で祖父と結婚するまで、或る宮家で女官を務めていましたが、元は嵯峨の農家の出。座敷のしつらえ、お茶事も教わりましたが、畑仕事も教わりました。さつまいも、じゃがいも、葱、大根・人参、胡瓜、南瓜。味噌屋だから獲れすぎても味噌漬にします。鶏も15・6羽飼って

いて、毎朝、卵を回収しました。お茶の木もあり、畑には実のなる木一柿・枇杷・蜜柑からバナナまでありました。私の仕事は、畑の水撒きと鶏の世話。鶏糞は畑の肥やしに、大根の葉は鶏の餌にと、完全なりサイクル。

#### 「土と緑の賞」の取組のスタート

1988年に伊佐義郎先生の提唱で「土と緑の賞」を始めました。受賞園は30ヶ園以上になります。緑と花を植えるから、栽培へと進みました。発展して全園対象に「かぼちゃコンテスト」を始めて4年になります。園に種を配り、プランターで育てます。重さで競います。収穫し、食材に触れ、調理して食べます。

#### 子どもを産むには 地域社会でのプロ

象が1～2頭しかいない動物園では、子象は生まれ難いそうです。おばあさん象、お母さん象が、沢山いて教えあって、子を産み、うまく育てることができるのです。象は低周波でそれはイカンとか、ヨロシイとか、コミュニケーションしているのだそうです。

地域社会には、お年寄りや、おばちゃんがいる、教え合い、

学びあって、子どもを産み、育ててきました。お年寄りが居るといっただけではダメ。孤独にしておいてはダメです。

京都橘大学では、地域の老人クラブと連携して、醍醐・男山・向島の団地は、看護科の学習と研究のフィールドになっています。

保育園は子育て、食育のプロが居る、地域コミュニティの結び目です。

人間が象より賢いのは、ヘッドクォーターを造ることでしょう。八瀬野外保育センターでは、運営委員会です。地域社会ではまちづくり協議会のような組織で、都市計画や植栽計画など、専門的な技術・知識を持つプロの存在と、連携役の意義もそこにあります。関係者間の調整と反省をして、進歩して行きます。人間が面白いのは、そこではたいてい、一杯飲んで潤滑油を注入し、愉快に親睦を確かにすることです。

#### 回転する奉仕と実業 動力源はパッション

フルート・コンサートは、地域計画・名古屋の尾関利勝さんの「製作・企画・演出」です。製作者として、資金調達、地



落ち葉が美しいセンターの庭





地域の子どもたち等による宣言  
域計画・名古屋とその役員個人の  
の提供です。

八瀬野外保育センターでは、  
皆でタンポポを植え、池を掘り、  
入れ替わり立ち替わり働いてき  
ました。自転車振興会、馬主協会  
に支援をお願いにも行きました。

日本万博の年、第1期「自然と  
のふれあい」をテーマに、既存の  
建物を改装した「ひいらぎの家」  
が出来ました。第2期・1952年  
「創造のよろこび」をテーマにし  
てのホール「からまつの家」は  
尾関さんの設計、「さくらの家」  
は岩瀬さんの設計。第3期・1981  
年「人と人のふれあい」をテー  
マに「かつらの家」は内村雄二  
さん（現・福井工大教授）の設計。

私たちの施設づくりは、なく  
てはならない仕事で、いわばハー  
ドウェア担当です。それにお  
泊り保育や保育研修などのプロ  
グラムがなくては動きません。  
ソフトウェアです。

実はそれにもう一つ「ハートウ  
ェア」があっぐるぐる回転  
します。そのみなもとはパッシ  
ョンというしかありません。皆さ  
んの無償の労働、落ち葉まつり  
で、室内楽を聴かせて下さって  
いたバイオリンの岩淵龍太郎先  
生、尾関さんらの奉仕の精神  
です。かくて、「落ち葉は、草木  
の涅槃の姿」となり、事業が持  
続するのです。



さくらの家：岩瀬誠一・画  
ニュースレターNo.23（1987年5月）再掲



神戸芸術工科大学によるアートワークショップ

## 「東条川疏水ネットワーク 博物館オープン記念シンポ ジウム」を開催しました

環境マネジメントグループ  
／森野真子・中川貴美子

兵庫県東播磨地域（加東市、  
小野市、三木市）で展開されて  
いる東条川疏水ネットワーク  
博物館構想の取組に関して、  
ニュースレター（第176号）で  
は「聞き書きプロジェクト」を  
ご紹介しました。平成23年度の  
構想策定時から本構想に基づく  
取組を継続して行っており、先  
日、3年間の取組成果発表と次  
なる展開に向けて記念シンポジ  
ウムを開催しましたのでご紹介  
します。

### 「東条川疏水の日」の制定

第1部の記念式典では東条川  
疏水ネットワーク博物館会議の  
内田一徳名誉会長（神戸大学理  
事 副学長）と赤木正明会長（兵  
庫県北播磨県民局長）、安田正義  
副会長（加東市長）等と地域の子  
ども達によって、東条川疏水の主  
な水源である鴨川ダムの竣工日  
である11月23日を「東条川疏水  
の日」として制定し、東条川疏水  
を地域の財産として、地域の手で  
次世代のために水の恵みを活か  
していくことが宣言されました。  
また、本地域は、その水の恵み  
を受けて栽培されている山田錦の  
主要産地であることから、お祝  
いとして東条川疏水ネットワー  
ク博物館会議の構成メンバーで  
ある山田錦振興組合の協力を得  
て幹事会社4社（剣菱酒造（株）、  
白鶴酒造（株）、辰馬本家酒造（株）  
（白鹿）、月桂冠（株））から提

## きんきょう

供された酒樽の鏡割りや来場者  
への記念品ミニボトルの希望者  
へのプレゼントが行われました。

さらに、功労・功績者表彰で  
は、これまで聞き書きプロジェ  
クトの語り手としてご協力いた  
だいた方々や出前講座に継続的  
に取り組んでいる地域の小学校な  
どが表彰されました。高校生や  
大学生が地域の古老にインター  
ビューしてまとめた「聞き書き  
プロジェクト2012 - 2014 作品  
集」がお披露目され、来場者に  
配布されました。

### 次なる展開に向けて

第2部のシンポジウムは、文  
化庁文化審議会世界文化遺産特  
別委員会の委員としても活躍さ  
れている藤原恵洋教授（九州大  
学大学院）による記念講演「大  
地と疏水とアート創造～東条川  
疏水流域をつなぐ叡智を巡っ  
て」が行われ、地域資源として  
の東条川疏水の価値や重要性に  
ついて分かりやすくお話しいた  
だきました。パネルディスカッ  
ションでは、内田名誉会長から  
は北はりま田園空間博物館（平  
成11年度からの立ち上げを当社  
の畑中が総合支援）、いなみの  
ため池ミュージアム、そして東  
条川疏水ネットワーク博物館の  
北播磨の3つの田園空間博物  
館の連携について提言がなされ  
ました。今後、地域間での連携  
も期待されます。

### 地域の資源に新たな価値を加え て次代に引き継ぐ

今回のシンポジウムは主に地  
域の方を対象に開催し、約600  
名の方にご参加いただきました。  
紙芝居や水を送る仕組みの実験、





きんきょう

アートワークショップなど地域の資源に新たな価値を見いだすための子ども向けのプログラムに笑顔で楽しく参加されている親子の様子から、地域において、今後も継続的に、資源の掘り起こしを行うとともに次の世代へつなげていく取組の大切さを再確認した一日でした。



地域の小学校の元先生による体験講座

## 神戸市サインモニター調査について

都市・地域プランニンググループ／中井翔太

みなさんは、初めて訪れたまちで目的地に行く際、どのように行き方を調べるでしょうか。人に尋ねる、地図で探す、スマートフォンの地図アプリを利用する等…何らかの「案内」に頼ることになります。

現在、神戸市ではこの「案内」を考え直す取り組みがなされています。具体的には、まちに設置されている案内サインをリニューアルするのですが、アルバックではそのお手伝いしています。

この事業の一環として、神戸を訪れたことのない方に、案内サインだけを頼りにある目的地を目指していただくモニター調査を実施しました。初めて神戸を訪れた人が「どのように案内サインを活用するのか」「どのような場所で迷うのか」また「どこで、ど



サインの前で案内する観光ガイド

のような情報を必要とするのか」といったデータと案内サインに対する意見を把握するものです。参加モニターの方々には、事前に情報を与えてしまうことを避けるため、当日、出発地点の駅に着くまで何をさせられるのかも殆ど知らされません。とても不安に思われたモニターの方もおられたことでしょう。

駅に到着したモニターの方は、そのとき初めて見る指示書を基に記載された目的地を目指します。

幸い、完全に迷ってしまい途中で諦めることになった方はおられなかったようですが、行ったり来たりを繰り返した方もおられたようです。

このようなご協力いただいた方々の苦勞の末、少しずつ神戸の「案内」に関する課題が見えてきたところです。神戸のまちは、大阪や京都、札幌の都心部に代表されるような格子状の街路を持ちません。規則性の少ないまちの中で、「山側・海側」といった神戸ならではの特徴を見つけ出し、今後、案内サインの板面表示や新しく導入する誘導サインのデザインに繋げていきたいと思えます。

通常、案内サインのような公共性のある設備や施設をつくる際、市民の意見を聞くことはよく行いますが、今回のように神戸とはこれまで縁も所縁も無かった方々の意見をとり入れようという試みは非常に珍しいのではないかと思います。これまで港町として多様な文化受け入れ発展してきた都市ならではの取り組みと言えるのではないでしょう

か。神戸市の案内サインは、今年4月以降、順次付け替えを行っていきます。今後、もし神戸を訪れる機会があれば、スマホの画面ばかりでなく、一度、案内サインをご覧になってください。

## コクヨのライブオフィスを見学して

環境マネジメントグループ  
／樋口彩子

大阪事務所の移転にあたり、働きやすいオフィス環境づくりの参考として、グランフロント大阪のコクヨライブオフィスの見学に行ってきました。ナレッジキャピタル11階にショールームがあり、12階がライブオフィスになっています。ライブオフィスでは、コクヨ社員が実際に働いている様子を見学でき、空間の使い方や人の動きを、見て、体感することができます。

コクヨは社内に常駐する一部の社員を除き、営業担当・設計担当とも、全員がフリーアドレスで、そのため席数は全社員250名の7割ほどです。週ごとに2、3の島の島に座るグループが決まっております。それがローテーションしていきます。実際にフリーアドレスの事務所を見たのははじめてでしたが、自由に席を選べるので、話したいことがあれば、隣のいすに座って、ちょっとした打ち合わせがその場でできる、カジュアルさが良いと思いました。

まず気づくのは、社内を見渡した際にどこにも書類がないということです。棚は、本が置かれる本棚しかなく、他の家具は主に可動式の机や椅子のみです。

社員の方もノートパソコンと、ほんの数枚の紙資料だけ持って、長机のひとりで、コンパクトに収まっています。空間に書類がなく、社員も書類を持っておらず、こんなに減らせるのが、信じがたく思いました。

書類が少ないのは、各社員に割り当てられたロッカーに収まる分以上は、書類を増やせないと決めているからです。動いている業務や保管すべき必要最低な書類以外は、全て電子化しています。書類の保管にも段階があり、一時的に期間限定で置いておき、廃棄するか検討すべき書類、廃棄せず、半永久的においておく書類がはっきりと分けて整理されています。書類だけでなく、文具の補充・使用のルール、マイナンバー等のセキュリティ管理など、効率化・共有化に細部まで徹底したルールがあります。

また使っていくうちにできた改善点も、社内中央の掲示板に貼られた平面図に付箋を貼って、気軽に提案できます。提案に対する対応状況（「現在、取り組み中」「改善結果」等）も掲示板でアナウンスされています。案内していただいたファイリング担当の方は、試行錯誤を繰り返して現在の仕組みを作り上げてきたと話されていました。

またオフィス空間については、目線を遮る棚がないため、非常に広々して感じられ、ぱっとみて、誰がどこにいるのかを把握できる感じでした。

広い空間ですが、様々な可動式家具が点在し、小さな仕掛けが沢山詰まっています。

家具の変化と連動して、スペースごとに床の色合いがちがっているところ、丘のように床が少し高くなっているところ、窓際に2人用の机が並び、少しふかふかした素材の椅子で、喫茶店のようなどころなど、様々な場を気分によって使い分けられます。

フランクな場だけでなく、集中できる場所も用意されています。窓際にややブース化した場所があり、時間単位で借りることができます。その他、プロジェクトルームという、プロジェクト期間に一時的に借りる部屋があり、期間内であれば荷物を出しっぱなしで、壁のホワイトボードも書きっぱなしで帰れます。

またミニキッチンがついて、普段はランチに使い、セミナー等のイベントも開催できる部屋、テレビ会議のできる会議室等、囲われた空間もあります。実際に働く人に、作業により働きやすい場所や、人気の場所を聞いてみたいと思いました。

見学後、ファイリングのお話もお聞きしました。書類の削減と管理は分けて考えること、目標を設定し、段階的に達成していくこと、社内のみんなでモチベーションを共有する重要性など、非常に有意義なお話でした。

見学を通して、ルールがあるだけでなく、それをきちんと運用できている徹底ぶりに感心しました。社内のコルクボードに改善を書き込むように、苦でなく気軽にできる改善を、日々、継続して行っているから、ちゃんと使えるルールになっているのだと思います。

現状、コクヨライブオフィスとはかけ離れた状態のアルパック社内ですが、参考にできる部分がたくさんあると感じました。

みなさん、自社のオフィス環境を考えるきっかけとして、ぜひ一度、訪れてみてはいかがでしょうか。

### 旅館をリノベーションした 甲陽園のシェアハウスに モニター入居しました

建築プランニング・デザイン  
グループ／塗師木伸介

私は昨年10月初めからの二ヶ月の間、兵庫県西宮市の甲陽園の料理旅館「まる長」をリノベーションして出来たシェアハウスにモニターとして入居していました。主催は宝塚の不動産会社ウィル。昨年10月に学生対象のコンペを行い、最優秀作品を実際に実現させるというプロジェクトです。当時まだ学生であった私は幸運にもその資格を頂き、実際に事業として成り立たせるプロセスから、モニターとして入居し、ルールを作るところまで関わらせて頂くことが出来ました。

大きなコンセプトは『借り暮らし』、『多世代交流』、『地域交流』の三つです。

コンペ時の作品のタイトルは「借り暮らしのシェアハウス」。だれのものでもない共用部をたくさん作るのではなく、庭いじりが好きな人が庭を管理し、料理が好きな人がキッチン管理するといったような、それぞれの住人の得意分野を生かした管理を行いながら、相互に使用し合う「貸し借り」をすることで、



きんきょう



1階の道に面する部分に設けられたBAR（手前）

足りないものは隣の人に借りるといった昔の長屋のような相互扶助的でおおらかな繋がりを生み出すことを目指しました。

また、それらの対象は若者だけである必要はありません。まだまだ元気なアクティブシニアの世代までも対象とし、貸し庭や一階部分に併設したBAR、地下の音楽スペースなど、地域の人もシェアハウスに参加出来るようにすることで、この場所を起点に甲陽園という町に多世代交流、地域交流の和を広げていくことを目指しています。



本来バルコニーである部分が隣と繋がって、隣人と楽しく使いこなします

そんなことを考えながら企画した建物にモニターとして入居し、みんなで基礎となるルールを作り上げます。初め、実験的に各共用部の掃除を週替わりで回していると、綺麗に対する感覚の違いや、物の収納場所等、全員で話し合っはまともいづらひが多くありました。そこで、最終的にまとまったルールとしては『借り暮らし』のコンセプトに基づき、それぞれの共用部を個人又はグループが管理し、ルールの改編等も担うことで、物事の判断が素早く、そ



ワンルームではあり得ない大きさの展望風呂（朝風呂がオススメ）

して明確になるようにしました。小さな主体が有機的に関係し合うしくみです。

そういった共用部がこの建物には散りばめられており、各個室は広くはないですが、とても広い家に住んでいる感覚になります。また、一人では夕飯で一品程度しか作れない私ですが、それぞれの住人が持ち寄ることでとても豪華な夕飯になるなど、一人暮らしでは得ることのできない豊かさを手に入れられるのはやはり魅力です。

私はこのシェアハウスが一時の流行として終わるのでは無く、息長く甲陽園の町に根付いてくれることを願っています。

### 富士山の麓から～育休所員からの便り

#### 都市・地域プランニンググループ／依藤光代

気高く美しい富士山を一目見ようと、河口湖などの観光スポットは外国人を含めたくさんの人でにぎわっています。現在私は、8カ月になる息子と出かけることが多くなりました。特急電車などにはおむつ替え台や授乳に使用できる多目的室があり、また駅ビルや百貨店には赤ちゃんの休憩ルームがあることが多いため、利用するタイミングを考えて計画的に行動すれば、長距離移動での世話で困ることは案外ありません。休日のおむつ替え台の前にはパパの姿が多く、驚きます。まさに育メンが増えていますね！

今年4月に職場復帰する予定です。どうぞまたよろしくお願ひします。



## うまいもの通信



### リフトと生きていく私

／東京事務所 黒崎晋司

何故、あなたはリフトをするのですかと、最近よく聞かれます。そんなときには、そこに麺があるからです！と、遠くを見つめる眼差しで、空を指差し笑顔で答えます。

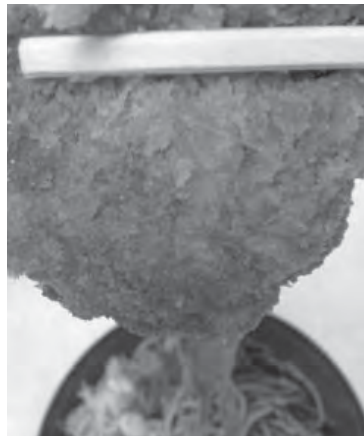
出張先で深夜にチェックインし、部屋で侘しく食事している男子を想像してみてください。哀れですね。先ほどまで熱くまちづくりを語っていた男子とは思えませんよね。冷たい風がひゅうと吹き抜けるようです。

そんなとき、カップ麺を吸りながら「リフトっ！」と雄叫びを發して麺を上げたくなるのはほくだけでしょうか。いいえ、ちがいます（反語）。

遠くに来て、一体自分は何をしているのだろう？少しは成長したのだろうか？麺はやさしく詩的な世界に誘ってくれます。

そんな暗いリリズムを切り取った写真は、つゆで濡れた麺が涙で輝いているようです。

都市プランナーの「光と影」を表現した隠喩型リフト様式美と言えるでしょう。



旅先では友人との出会いなど楽しいこともたくさんあります。

例えば、會津地域を訪ねる際、乗換えの郡山駅で行う儀式にはリフトが欠かせません。

コロッセ蕎麦のリフト画像をSNSに投稿するとあら不思議、會津の友人が呼応してサインが送られてきます。

「よく来たね」「待ってるよ」の含意で「ナイス！インド！」などの暗号を受けとります。

このように、現地に足を踏み入れる前に密かに友人とリフトで交信しているのです。

現地を訪ねて、話を聴かせていただき、大切な友人たちとの交流を広げ親交を深める。

現場や地域への仁義や礼節をふまえた合図として、リフトは有効で美味しい手法なのです。

都市プランナーの「地域愛」を代弁する対話型リフト方法論と言えるでしょう。



「商いの基本は細く長く」と世間では言われています。

麺は、そうした精神の在り方を体現するだけでなく、流れる水のように変幻自在にその姿を変容させ物象化してくれます。

真横から見たり、斜め下から見たりと、多角的な切り口から眺める様は、新たな視点や発想の源泉に他なりません。

都市プランナーの「創造力」を産み育む分析型リフト弁証法と言えるでしょう。

(つづく)



カップ麺のリフト

## デザインマンホールにハートがずっきゅーん！



大阪事務所／中村孝子

数年前、ふとしたことから市町村によってマンホールの蓋のデザインに違いがあることに気がつきました。最初は、市町村章、まちの花や木などシンプルなものを見かけていたのですが、中には史跡やお祭り、特産品などバラエティに富んだデザインがあることを発見しました。わずか直径60センチの地味で小さな世界が一気に広がっていきました。以来、私は足もとばかり見て歩き、スマホはマンホールの画像だらけというありさまです。

下水道のマンホールには基本的に「雨水」「汚水」「合流」がありますが、自治体によっては、水道栓、消火栓の蓋までがデザイン化されています。また、駅前や市役所などの公共施設、観光スポット、商店街など、多くの人が利用する道路にはカラー

のマンホールも見かけるので、歩く楽しさが倍増します。

さて、色々調べてみると、マンホールのデザイン化は昭和60年に当時の建設省公共下水道課が下水道事業のイメージアップのためスタートしたそうです。全国市町村でのデザイン化は徐々に普及し、最近では、どこでもデザインマンホールを見かけるようになりました。さらにマンホール学会までできています。

マンホールの魅力は、デザインだけにとどまりません。特筆すべきものとしては、石川県かほく市には「かほく AR ストリート」なるものがあり、そこにはAR (Augmented Reality = 拡張現実) という技術が埋め込まれたマンホールがあるそうで、専用アプリが入ったスマホでマンホール画像を読み取ると映像が

流れるそうです。ますますマンホールの魅力にとりつかれる自分がいます。

先日、東京で開催されたマンホールナイトというイベントに参加してみました。会場は、私のようにマンホールファンでいっぱいでした。そこでマンホールとの出会いを求めて、日本各地を旅する女子たちの存在を知りました。世間では、私たちのような女子を「蓋女<sup>ふたじよ</sup>」というらしいです。彼女たちに親近感がわくとともに関東中心の活動のようなので、近くに蓋女仲間がいることをうらやましく思いました。求む、蓋女仲間！(笑)

まだまだ、初心者の蓋女だと痛感しましたが、これからも自分の足で各地を訪れ蓋女の道を歩いていこうと思います。

(つづく)



①小平市、②御所市、③松原市、④太子町（大阪府）、⑤岡山市、⑥豊中市、⑦茨木市、⑧大和郡山市、⑨泉大津市、⑩大阪市

## arpak アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates · Kyoto

<http://www.arpak.co.jp> E-mail [info@arpak.co.jp](mailto:info@arpak.co.jp) ニュースレターはホームページからもご覧いただけます。

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F

TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F

TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128